

『幸福の道しるべ』

学校は子どもたちの『幸福の道しるべ』になっていますか

こんなタイトルで昭和女子大学押谷先生が「教職研修」に一文を載せていた。

先生は教師になろうと教育学部に入学したが、「教育とは何か」について自分が納得できる説明になかなか出会えなかった。そんなとき、ふと手にしたのが広島大学長・皇（すめらぎ）士道氏の『現代教育学』、その副題に「幸福の道しるべ」と書いてあった。

「これだ!」と思ったという。教育とは、幸せな生き方を目指すものである。それは、子ども達が幸せな生き方ができるようにしていくと同時に、教師自身も幸せな生き方を追い求めていくことである。とするならば、子ども達と教師が、ともに幸せな生き方ができるように、日々の生活を充実させ、かつ追い求めていくことが教育だということになる。

そこで先生は私達に問いかけている。「あなたの学校は、あなたの学級は、一人ひとりの子どもたちにとって『幸福の道しるべ』となっていますか。」と。

今、学校は、学力向上に向けていろいろな取り組みがなされている。それは大切なことではあるが、さて、そのことで子どもたちは幸福感を味わっているであろうか。変な劣等感や優越感を持つことなく、互いに助け合い協力しながら、互いに磨きあうような取り組みが準備されているであろうか。

実は、このことをしっかりと考えることが、道徳教育なのだと先生は説く。一人ひとりの心の中にある、よりよく生きようとする心を共有化しながら、ともによりよく生きられるように学習活動や日常生活を充実させていく。それは、道徳教育を基盤とした学校づくりに他ならず、子どもたちの一人ひとりの幸福を求めての教育活動ということになる。

今の教育界はいろいろな批判にさらされている。無理難題も押し付けられている。様々な課題をもつ子どもたちがいる。この現実ではとても幸せな気分にはなれないと嘆く先生方もいることであろう。さて、そこでである。教育のプロとしてそこを乗り切らなければ本当の教育はできない。

ではどうするか。先生の言葉を借りる。

「あなた自身が自分の生き方を真剣に考えてみることです。それはあなた自身の道徳教育にほかなりません。」

先生自身が自分を磨いているかどうかを、子どもたちは見抜いているのである。